

世界遺産「平泉」の思い

岩手県県南広域振興局 世界遺産推進課 菅原健司

「いにしへの心、あしたを照らす光。」

本年6月、「平泉の文化遺産」は世界遺産となった。平成13年の世界遺産暫定リストへの登載以来、平成20年の「登録延期」を経て、再度の挑戦で掴んだ念願の登録である。

この間、地元の岩手・平泉町では、全国でも規制の厳しい景観条例を制定し、世界遺産にふさわしいまちづくりを進めてきたほか、「平泉」についての県内外への普及啓発や、ガイド機能の充実といった観光客受入態勢の整備など、世界遺産登録の実現に向けて、地域・県が一体となった様々な取組みを行ってきた。

折しも、3月11日に発生した東日本大震災津波では、東北の沿岸各地が未曾有の被害を受け、多くの尊い命が失われたが、日本全国、海外から多くのご支援や励ましをいただきながら、一日も早い被災地の復旧・復興に向けて思いを一つにしていた時期に世界遺産登録となったことは、地元のみならず岩手県全体で、とても大きな喜びとなった。

平泉は、登録前でも年間150～200万人の観光客が訪れていたが、震災後のゴールデンウィークは、イベント中止の影響もあって、前年比85%減となるなど、観光客の激減が深刻な状況であった。それが、登録決定と同時に多くの観光客にお越しいただき、例年以上のにぎわいを見せており、正に「登録効果」を実感しているところである。

さて、「平泉の文化遺産」、正式には「平泉

－仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」は、平安時代末期に奥州藤原氏が築いた、中尊寺や毛越寺をはじめとする仏教寺院や浄土庭園などからなる文化遺跡群である。日本固有の自然信仰と仏教が融合し、仏国土(浄土)を現世に表現しようと独自の発展を遂げてきたことなどが評価されている。

このように、平泉には、素晴らしい寺院や庭園が残されているが、それ以上に、平泉が築かれた「思い」に価値があると考えている。

二度にわたる激しい戦乱で、父や妻子を亡くした奥州藤原氏の初代清衡公は、「戦争で亡くなった全てのものを、敵味方の区別なく安寧に導きたい」との願いをこめて、中尊寺を建立した。戦乱の無い平和な理想郷を目指し、「人と人との共生、人と自然との共生」を理念として築かれた「平泉の思い」は、東北の震災からの復興に取り組む理念にも通じるものと認識している。

この度の世界遺産登録により、国内をはじめ、全世界から「平泉」が注目されている中、岩手県では、今まで以上に、冒頭のキャッチコピーに込められた世界遺産「平泉」の思いを発信していきたいと考えている。

多くの皆様に、ぜひ平泉にお越しいただき、浄土の風に触れていただければ幸いです。

(すがわら けんじ)

(平成11年度に農林中央金庫で研修)